



シヨート・カメリ



北野勇作

【歩行】

カメリは歩くのが好きだ。

一般的には、カメは歩行が苦手であると考えられているらしい。

でも、カメリはそんなことはない。

速く歩くことができないだけで、歩くことは好きなのだ。

だからホンモノのカメもそうなのではないか、とカメリは推論する。

たとえば、カメリに関して言えば、速く歩くことは苦手だが、長時間に渡って同じペースで歩き続けることならできるのだ。その持続力と安定性は、運動能力の高さを誇るヌートリアンのアンが感心するほどである。

まあ模造亀っていうのは、見たり聞いたりしたものを甲羅の中に貯め込むようにできてるみたいだから、そういう移動のほうがいいのかもね。

いつかアンがそんなことを言っていた。そして、カメリはそのこともしっかりと憶えている。

なるほどねえ。もしもしかめよ、かめさんぽ、なあんてな。

マスターが歌うように言って笑い、それってセクハラよっ、とアンが肉球でマスターの石頭を勢いよく叩いたことも。

そんなあれこれをきちんと甲羅の中にしまっておけることが嬉しい、とカメリは思う。

そうすることが好きだと思う。

嬉しい、というのがどういうことなのか。好き、というのがどういうことなのか。そもそも、思う、というのがどういうことなのか。

カメリにはよくわからないし、よくわかっていない、ということもわかっているのだが、よくわからないままに、そう思う。

そう思うことにしている。

そして、そんなふう材料が不足したままでも仮説を立てたり、あれこれ推論したりできるのが、たぶん模造亀の持っている機能なのだろう、と推論している。

とくに、目的もなくこうしてただ歩いているとき、よくそういうことをするのだ。そういうふうに行っているのか、それともそれは模造亀の中でも自分だけのものなのか。それもよくわからないが。

前からずっと、わからないまま。

わからなくても止まってしまう前に進み続けることができるのが、いちばん不思議なところなんだよな。前にマスターが言っていた。

それがどの程度の事実を含んでいるのか、カメリには判定のしようがないが、それでもこうするのが好きでこうしていると嬉しいからこうしている。

カメの歩みだな。

マスターが感心したように言い、そのときアンは、それってセクハラよっ、とは言わなかった。

そんないろんな場面を、カメリは甲羅の中に貯め込んでいる。

テレビの中のヒトが、何かを好きになるいろんな場面にそれは似ているのではないか、とカメリは思う。どこが似ているのかわからないが、似ていると感じる。

レプリカメがホンモノのカメに似ている程度には――。

そんなわけで、なのかどうかはカメリにもわからないが、カメリは今日も散歩をする。

もしもしかめよ、かめさんぽ。

マスターの歌声が、甲羅の中でのくるくる回る。それにあわせるようにカメラは歩く。

カメの歩みで。

日曜日なのだ。

カフェはお休み。

ヒトデナシたちもお休み。

そして今日のカメラには、なんの用事もない。

目的もなく、ただ歩く。

ときには立ち止まって、見つめたり触ったり嗅いだりしながら。

だいたい同じペースで歩く。

それはなんだか楽しい。

つまり、それを楽しいとカメラは仮定する。

そして問題がない限り、そのまま運用する。

そういうこと。

楽しいから、歩いている。

もしもしかめよ、と尋ねられたら、そう答えるだろう。

楽しいから。

尋ねられないだろうから答えもしないだろうが。

そんなカメラの甲羅の中のどこかで、今日もマスターが歌っている。

もしもしかめよ、かめさんぽ。

【甲羅】

そんな呼び名の飲み物があることをカメラは初めて知った。

おれは飲んだことあるよ、とマスター。まあずいぶん昔だけだな。

へええ、ほんとに飲んだのかい。

常連のヒトデナシが言った。

すかっとするんだろ。

ああ、まあそんなところかな、とマスター。

すかっとする、って、いったいどうなるんだい。

うーん、とマスターが腕組みして考え込むように石頭を傾けたから、ヒトデナシたちは注目した。

うーん。

マスターはしばらくうなり続けてから答えた。

ちょっと言葉じゃ説明できないな。

まあそうだろうね。

ヒトデナシたちがうなずいた。

まあそうだろうよ。

言葉で説明できないものはいろいろあるからな。

恋とかね、とアンが遠くを見るような目で言った。そして、テレビの中のヒトの口調を真似てこう続ける。

恋ってどんなものかしら。

それは飲んだことないなあ、とマスター。

そんなマスターを無視するようにアンはため息をつき、ヒトデナシたちが、あはは、と形だけで笑い、カメラはカップを洗った。

こういうカップではない。

洗いながらカメラは、まだ同じことを考え続けていた。

さっきテレビドラマに出てきた飲み物のことだ。

テレビの中のヒトたち――恋人たち――が飲んでいた。

こういうのではなくて、と洗っているカップを見ながらカメラは思った。もっと細長くて、それに透明だ。水みたいに透き通っている。それがグラスというものであることをカメラは知っている。

でもテレビの中以外では見たことはなかった。ノミの市で探したりはしているが、見かけたことはない。

いろんな掘り出しもののなかでも、なかなか掘り出せないもののひとつなのだろう。

このカップのように粘土で形だけは作れたとしても、透き通っている、というそのいちばんの特徴はどうにもならない。

どうにもならないものは多いのだ。ひとつのグラスから二人で飲むためのあの細長い管とか。いつかどうにかなるのかどうかもわからない。

あの飲み物に関しては、グラスや細い管だけでなく、他にもいろんな飲み方があるようだった。真ん中のあたりがくびれた透明の容器の細い口を自分の口でくわえるようにしたり、缶の上にあいた穴を口でふさぐようにしたり。

とにかく、いろんなことをしながらいろんなところで飲んでいて。走ったり、飛び跳ねたり、手を叩いたり、足を踏み鳴らしたり、笑ったり、他にもなんだかわからないことをしている。

日光の下で、大勢で。

そういうふうに飲むものなのだろうか。

だとしたらこのカフェにはふさわしくないものかもしれない。

カメリはそう推論する。

ここは仕事に出かける前と仕事を終えての帰りに寄るところだから。

あんなふうに走ったり跳ねたりしながら飲むもののだとしたら、ここではとても無理だろう。

カップを洗いながら、それでもカメリは、さっきテレビの中でヒトが発していたいろんな音を自分の中で再生してみる。

甲羅の中に貯め込んだあのいろんな音。

ここにはもういないヒトが発する音を。

甲羅の中で。

そうだ。それもまた、あの飲み物のことが気になる原因のひとつだろう。

同じ音なのだ。いや、正確には同じ音ではない。アクセントの位置も違う。でも、よく似ている。かなり似ている、とカメリは思う。

甲羅。

ねえ、いったいどういう味がするのさ。

アンがマスターに尋ねる。

うーん、なんて言えばいいのかなあ。

マスターが石頭をつついて言葉を探すようにする。

なんて言うか、その、つまり、しゃわしゃわするんだよな。

しゃわしゃわ？

そう、小さな泡がはじけるんだ。しゃわしゃわ、ってな。

へえ、はじけるんだ。

ああ、はじけるんだ。ずっとはじけてる。それでしゃわしゃわするのさ。

わっかんないなあ。

アンが首を傾げる。

うん、こればかりは、言葉じゃ説明できないな。

マスターが申し訳なさそうに言った。

思い出の味、ってところかな。

思い出かあ、とアン。

それならやっぱり同じだ、とカメリは思う。

言葉にはできない記憶。

そんな思い出が詰まったもの。

カメリにとっての甲羅。

ショート・カメラ

<http://p.booklog.jp/book/112341>

著者：北野勇作

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitanoyuusaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112341>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト